

**50****号記念エッセイ**

テリトリー、あるいはコモンズ？ —— 非文字資料研究の学問的位置

熊谷 謙介（非文字資料研究センター 研究員）

非文字資料研究センターの運営に編集委員長としてかわるようになったのは2014年度からなので、研究の動静をつぶさに見てきて、まもなく10年ということになる。かつて「年報」と称していた紀要論文集は年2回発行の『非文字資料研究』となったが、質量ともに優れた論文集であることには変わりがない。本ニューズレターも50号を迎え、また各班の叢書などの成果物が毎年着実に発行されていることと合わせて、寄稿者そして論文の質を保證する査読者への感謝を、ここでまずお伝えしたいと思う。

紀要『非文字資料研究』では寄稿者に対し、提出される論文が非文字資料研究だといえる理由をエントリーシートに記入してもらっている。とはいえ、多様な研究領域から発信される論文が「非文字資料研究」としての資格があるか、また査読をする立場からも、今読んでいる論文が『非文字資料研究』にふさわしいか否かを判断する根拠は、明示されているとは言えないだろう。

もちろん、寄稿者が非文字資料を扱っていることを自問し、それを言語化するプロセスは貴重であるように思う。一方で、文科省の21世紀COEプログラムに2003年度に採択されて2023年で20年を迎え、非文字資料研究にも歴史が生まれ、今までの試行錯誤を振り返る時期になったとも言える。初発の動機を確認するとともに、この20年の間に起こった、立ち上げ当時の状況の変化を見定める必要もあるだろう。

私自身、ヨーロッパ班の一員としてヨーロッパ生活絵引の制作や、身体表象研究を行ってきたが、フランス文学研究者として非文字ならぬ文字資料を相手にしてきた者であり、表象文化研究者として絵画や祝祭文化を分析してきた者でもある。いわば文字資料と非文字資料の間に立って、隣接学問領域との関係から見える、ありうべき「非文字資料研究」の姿を描き出したいと思う。

資料の体系化

「非文字資料研究とは何か？」——、これはCOE時代に繰り返し議論された問いであった。図像・身体技法・景観という3つの軸で班ごとに研究を進めつつ、理論班が組織され、合同シンポジウムにおいて意見が戦

わされた。報告集『人類文化研究のための非文字資料の理論的課題について』は当時の熱い議論を伝えているが、ここでは橘川俊忠氏による「非文字資料の体系化」についての理論的諸問題に注目したい¹。

冒頭では、本ニューズレター冒頭の中林センター長の挨拶にもあるように、図像・身体技法・景観という3つの分野は「比較的研究の進んでいる」分野という理由で選ばれたとし、これらの領域に非文字資料研究が必ずしも限定されないことがうかがえる（実際、第4の分野として「民具」が付け加わることもあった）。そして「それらの分野で研究を進める中で、材料・素材として存在する資料を研究対象としての資料としてどのように「資料化」できるかを確定し、その上に立って人類文化研究のために一般的理論化を図っていくことを考えた。」(73)「非文字資料とは何か what?」よりも、「どのように how 資料化するのか?」という問題が強調されており、それはタイトルにある「体系化」という言葉で言い表せるものである。非文字資料を解明するよりも先に、まずは資料を発掘・整理・アーカイブ化することが主眼であり、資料を分析して答えを出す前にまず資料を提示するということは、(現在のみならず未来の)学問コミュニティへの寄与となる点で見逃せない指摘である。

また、過度の理論化・一般化を警戒する姿勢も見られる。「理論は、現実から離れて、抽象的に構想されるべきものではなく、現実を正確に認識するための「道具」でなければならない」こと、「個々の研究者の持つ個別の仮説を、まずは許容する」こと(74)。このようなスタンスは、新しい学問の立ち上げ後に、概念の抽象化に突き進んだり、純化路線に向かったりする傾向がよく見られるだけに貴重なものであろう。

コンテキストから外すこと?

一方で、既存の学問領域からの差異化・棲み分けのために、資料をもともと属していたコンテキストから外すことも強調されている。図像研究の中心であり、濫澤敬三以来の伝統を持つ絵引を例にすると、絵巻に描かれた物語や様式からではなく、制作者の意図とは異なる角度から図像を見るという立場である。端的に言うなら、

「わざ」と描かれたものを見るのではなく、「まま」に描かれたものを見るということである。これは福田アジオ氏も強調してきたアプローチであり、文学研究や美術史とは異なる見地を示す狙いがあったように思う²。

このような視点の転換は、民俗学的立場から見れば、事物の説明のために書かれた図版とは異なる資料の発見、コーパスの拡張をもたらすものであり、ありのままの生活文化の発見を導くものであるかもしれない。しかし、このような「文脈外し」によって、民衆の生活の「客観的」な、「真正」の姿は本当に顕現するのだろうか。とくに『清明上河図』など、国の威信をかけた都市眺望図ともいべき作品では、「見せたくないものは描かない」というイデオロギー的なバイアスは無視できないし、実際にあった情景を写し出すことなく、先行する作品を引き継いだ「記号」が画布に置かれる場合も少なくない。

既存の資料を新たな観点から読み直し、文字資料研究や美術史研究など、既存の学問的アプローチでは明らかにされなかった事実をスクープする——、このような差異化の戦略は新規参入の学問として間違っていないはずである。一方で今は、資料を批評的に扱う時である。具体的には、当該資料が「どこに由来し from」、「何を媒介とし by」、「どこに向けられているか to」を検証する必要がある。文脈を見なかったことにするよりも、美術様式や政治状況、メディア環境など複数の文脈を理解したうえで、当時の状況を「再構成」することが、今求められるのではないか。

協働の場としての非文字資料

そもそも非文字資料研究センターが日本常民文化研究所の附置として設置されているように、その研究が歴史学・民俗学をバックボーンとして開始されたことは否めない。歴史学において20世紀末から21世紀にかけて盛んに援用されたのが、アナル学派に端を発し、アラン・コルバンなどによって展開された感性の歴史であったが、現在においては、その革命的な意義は薄れ、すでに共通の了解事項とされている感がある。

実際、この20年間で起こったことは、カルチュラル・スタディーズや、カルチュラル・ターンといった認識の普及であり、非文字資料研究においても扱う資料は急速に拡大している。そこでは建築学や技術論、美術史や地理学、最近では観光学や舞台芸術論など、さまざまな知見を結集させて対応すべき領域となっている。

また歴史研究においては、日本でも、私が知るフランスでも、図像などを資料に組み入れた中世史が刷新のモデルとして扱われることが多く、民俗学とともに「純粋・真正の」事象が追求されてきた。しかし今では、近・現代のいわば「不純・変容した」伝承もまた、考察対象となっている。観光客といった、共同体の内側ではなく外側からの視点であったり、テーマパークなどの反歴史的・ノスタルジー文化、さらには狭義の「常民」に

とどまらないマイノリティ＝オルタナティブ文化（移民、労働者、女性…）もまた、俎上にあげられる時代である。そして非文字資料研究とはいえ、文字資料研究との協働も不可欠のものとなっており、「ことば」と「かたち」（木下直之）の相互作用として文化事象を見る視点こそ、これから求められるものなのではないか。

脱文脈から複数の文脈へ

このように隣接する学問領域と棲み分けをせず、むしろ資料を共有し、その解明に向けて共同であたっていくという姿勢は、実は先述の橘川氏の論考にも見られるものである。

[非文字資料の]「体系化」には、もう一つの作業がある。多様に存在する非文字資料と、すでに存在する、あるいは確立されている学問領域との関係を明らかにし、非文字資料を研究することが、その学問領域にとってどんな新しい知見を加えることになるのか、さらに、既存の学問では扱えないとしたら、どんな新しい学問分野を開くことになるのかを明らかにする作業である。同時に、これまで何度も述べてきたように、非文字資料に含まれているインプリシットな情報を引き出すために不可欠な、異なる学問からの視線をどのように当てていけばよいか、言い換えれば異なる学問分野の協力をどのように組織するかという問題の検討も、「体系化」を考える上で重要な課題となる³。

「異なる学問分野の協力をどのように組織するか」——、それは異分野に属する研究者に、非文字資料研究のプロジェクトに積極的に参与してもらうことを意味するのと同時に、アプローチの相違を前提として、あるときは議論、あるときは許容しあいながら、非文字資料を人類の共有財産としていく試みと言えないだろうか。さきほど木下直之氏による「ことば」と「かたち」というフレーズを借用したが、これは東京大学大学院人文社会系研究科に2000年に設立された文化資源学専攻に寄せられた文言であった。ことばのみならず、有形無形の資料を資源として活用しようとする文化資源学の狙いは、非文字資料研究もまた共有するものである。「かたち」をめぐる議論もまた、今後、共同して繰り広げられることを願っている。

[注]

- 1 橘川俊忠「「非文字資料の体系化」についての理論的諸問題」『非文字資料研究の理論的諸問題』（非文字資料研究センター研究報告書）2008年、pp. 73-90。
- 2 例えば、「図像資料と民俗学」『年報 非文字資料研究』第5号、2009年、pp. 159-172；『生活絵引編纂の世界的意義』『神奈川大学21世紀COEプログラム 第2回 国際シンポジウム 図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』2007年、pp. 60-72。
- 3 橘川、前掲論文、p. 88。